

## 第十七話 「自炊」について（上）

### ●「昭和」というチョンマゲ

今回のことについて、なにを、いったいどのように書き出せばいいのか苦慮している。目をつぶって、なかったことのようにスルーすれば悩みもないのだが、時代の趨勢を考えればそうもいかない。もったいぶったって仕方ない。私は、何を言おうとしているのか。

それは、電子書籍を手作りする「自炊」について、だ。

これまで、さんざん書いてきたが、私は、加速する世のデジタル化について、周回遅れでとぼとぼ追従している人間だ。ときどき足が止まりかけるぐらい、歩みは遅く、先頭集団と一緒にゴールする気持ちなど最初から失せている。

具体的には、音楽はCDで聴いているが、ダウンロードして iPod というところまでは行かない。それどころか、ときどき古いレコードをターンテーブルに載せて聴くこともある。

ケータイは所持しているが、使うのは外出時のみで、家にいるときかかっても出られない場合が多い。そもそも、どこに置いたのかも忘れて、家の電話から自分のケータイへ電話して、その居場所を確認することもある。メールも検索もできず、電話帳登録も自宅の一件だけ。

パソコンは商売道具なので、原稿作成のために駆使しているし、毎日のようにブログも書いている。情報検索もするし、メールも打つ。しかし、いまだその機能については、霧の立つ森のなかを歩いているようで、まったく心もとない。じつはここだけの話だが、プリンターは持っているが、画像をプリントアウトしたこともない。地図を使うときなども、グーグルマップなどで検索し、該当の場所を紙の地図帖に描き込んでいる。「PDFをプリントアウトしていただいて」なんて指示が来ると、「悪いけど、ファクスしてもらっていいですか？」と泣き声になってメールを送るハメになる。

もっと言えば……いや、やめておこう。こんなこと、いくら書いても仕方がない。バカだと思われるだけだ。少しだけ言い訳をすると、どこかで、あんまり便利なものにどっぷりとはまり込みたくない、という制御心が働いているのだ。

要するに、「昭和」というチョンマゲを、どうしても切る気になれず、世のデジタル化の恩恵を充分受けているにも関わらず、どこかSF的進化の世界からは、拗ねて背を向けている。イヤな奴だ。もちろん「ALLWAYS 三丁目の夕日」シリーズはおいおい泣いて観る。新作「'64」も観に行くぞ。

### ●「自炊」って、なに？

「自炊」ということばを、これまでと違った意味として使われているのを知ったのはい

つ頃だろうか？ 本や出版に関する新聞記事を貼付けたスクラップブックを繻くと、二〇一〇年八月二十日付け「毎日新聞」の「本の『自炊』脚光」という見出しの記事がもっとも古い。もう一つの見出しが「スキャナー読み込み→マイ電子書籍に」とある。これで、「自炊」なるものの新たな意味を知って驚いたのだった。

貧乏な学生が、西日の射す四畳半の下宿に住み、夜になると鍋で飯を炊いて、きゅうりのキューちゃんの特売の鯖の缶詰で食事を済ます。これが従来の「自炊」のイメージだが、記事を読むと違うのである。

「本のとじ目を切り落として1ページずつばらばらにしてパソコンにつないだスキャナーで取り込み、電子データで保存して読む。『自炊』はネット上の俗語で、『自分でデータを吸い込む』イメージに『炊』の字をあてたからなど諸説ある。持ち歩きしやすい米アップルの新端末『iPad (アイパッド)』の登場が自炊化を後押しする」と記者の岡礼子が、わかりやすく解説している。

鍋でご飯も、鯖缶もまったく関係ない。これは読書環境における、新しいスタイルの登場だった。二十一世紀を舞台にした「鉄腕アトム」では、アトムは小学校の教室で紙の教科書をみんなと一緒に読んでいる。端末でデジタル化された書籍を読むという場面はおそらくないと思う。天才・手塚治虫でさえ、予測出来ない事態が出現したとっていいだろう。しかも、そこに「自炊」という、やや貧乏くさいことばをあてはめたところが、どうにも奇妙な感覚だ。

材料を切り刻んで、別の道具を使って仕上げるところは、たしかに「料理する」という表現に近い。「毎日」記事にある通り、「自炊」には、すでに持っているパソコン以外に、新たに道具が必要なのだ。ページの両面に対応できる精度のいいスキャナーと、本のとじ目をバラバラにする裁断機だ。

二〇一〇年の記事掲載時点で、「ネット通販大手のアマゾンでもスキャナーと裁断機の人気機種は6月の注文数が4月に比べ倍増した。ヨドバシカメラ新宿西口店では7月末から、自炊方法を紹介するコーナーが設けられている」という。

どうやら、「自炊」はデジタル世代に歓迎され、受け入れられているようだ。しかし、あたりまえだが初期投資が必要だ。まず裁断機だが、「ブック 40」という機種が一万六千五百円。カッターナイフを使って裁断することも可能だが、三百ページの本を一度で切り落とせるわけもなく、けっこう時間も力も必要だ。紙の束は数枚なら安々と切れるが、何百枚と重なると強固になるからだ。

スキャナーの最新事情についてはくわしくないが、試しにアマゾンで検索すると富士通の「Scan Snap S1500」という機種が五万七千円。性能のいいものは、もっと高価だ。裁断機の方も、刃は永久的に使えるわけではないから、継続して使うなら、定期的な交換が必要だろう。これにもお金がかかる。

いったんデジタル化して、ファイルに取り込んでしまえば、場所を取らず、自由にいつ

でも取り出せて便利。それはそうだろうが、そこにたどりつくまでの作業が、面倒ぐさがり屋の私には、非常に迂遠で、厄介なことのようには思える。

## ●ブームの背景

「自炊」がかなり広く、浸透しているのだらうと思わせるのは、『【自炊】のすすめ 電子書籍「自炊」完全マニュアル』（インプレスジャパン）という本が出ているからだ。著者は山口真弘氏。略歴を見ると、「テクニカルライター。PC周辺機器メーカー2社、ユーザビリティコンサルタントを経てライターとして独立」うんぬん、とある。これに続く紹介も、古いポンコツのライターである私には、ほとんど意味不明だ。

著者は『【自炊】が突然広まった背景』として、一つには、電子書籍を読む端末として、iPadを手にしたとき表面化した問題として、「日本語で読める電子書籍タイトルがまだまだ少ない」を挙げている。

たしかに、紙の本の出版と同時に電子書籍も発売するのが当たり前となったアメリカの出版界に比べると、日本の電子書籍市場はまだ遅れている。また、値段の方も「米国では書店で本の値引きができるが、電子書籍はそれよりも安い場合がある。例えば30ドルの新刊が、Kindleで9ドル99セントで売られている」（「朝日新聞」二〇一一年三月二十二日）というのに比べたら、日本の場合は、そこまで安くはできないのではないかな。

「自炊」するための道具を初期投資で購入すれば、あとは、これまで買った本（それはすなわち自分の好きな本）を、電気代程度で電子書籍化できるわけだから、たしかにいい。

この「好きな本を好きな端末で楽しめる」という点と、もう一つ、大きなメリットとして著者が挙げるのが「本の置き場所を減らせる」だ。

「本棚の本を『自炊』して、元の本を処分してしまえば、物理的な置き場所が必要なくなります。データを保管しておくハードディスクのスペースさえあれば、たくさんの本が収納できるのです。たとえば、2TBのハードディスクなら、自炊データ1冊が平均50MBとして、約4万冊が格納できることになります」

まあ、四万冊の蔵書を持つ人は、そうはいないだろうが、とにかく、ここを読む限り、「自炊」があれば、「蔵書の苦しみ」も解決できることになる。

試しに「自炊」でネット検索してみると「はてなブックマーク」の「B! ニュース」というサイトで、「自炊のすすめ」を説いていた。ここにも、「とにかく家の中で幅を取るのが、『本』という物体」で、読んだあとも「邪魔になってうんざり」などと書かれている。見出しも「もう紙の本にサヨナラ？ 溜まった本はバラバラにしてPDF化」とある。

ここまで言われると、本好きの私としては「おいおい、ちょっと待てよ」と難癖をつけたくなくなるのだ。どうです？ みなさん。